

都市の未来を描き、 日本の未来を支えるまちづくり。

まちづくりには、理系の力を活かせる広範なフィールドがある

■住宅の提供からまちづくりへと役割が推移

URの前身である日本住宅公団が発足したのは1955年のこと。当時は高度経済成長期にさしかかり、都市に多くの人たちが集中して「住宅不足」が叫ばれた時代でした。そこで日本住宅公団はニュータウン開発を促進するなど公的な立場から集合住宅の供給を行い、同時に周辺の街を整備してきました。

住宅不足が解消すると、日本の人口構成、住宅や街へのニーズの変化を受けて、住宅・都市整備公団（現・UR）は過去の経験をもとに豊かなまちづくりに寄与する役割を担うようになります。駅前広場や工場跡地などを活かした再開発は、事業が長期化するなどのリスクを伴うため、民間企業が単独で実施することは容易ではありません。そこで、URは公的な立場から全国でまちづくり

高度経済成長期から40年以上が過ぎ、日本の都市は再生の時期を迎えつつある。当時の建築物は老朽化しているだけでなく、現在求められる都市のあり方や機能に対応できていない点も少なくない。そこで今、2020年のオリンピックをひとつの節目として、さらにその先も見据えた都市の開発・再生が活発化している。

今回取り上げる東京・渋谷駅も、再開発が進行している地区のひとつ。渋谷駅という都内有数のターミナルにおいて開発を支えているのが、独立行政法人都市再生機構（以下、UR）だ。「なぜ、再開発を行うのか」「駅と街を再生させるとは、どのようなことなのか」「同プロジェクトを担当する三上氏に話を聞いた。

■渋谷の「不便」を解消し、都市再生を支援

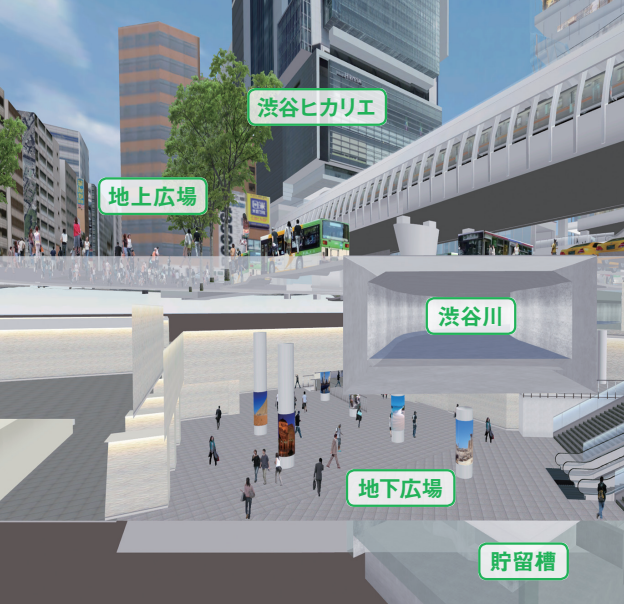
現在の渋谷駅周辺は1885年の駅開業以来、1964年の東京オリンピック等を経て発展してきた。しかしながら、まちの発展とともに増改築を繰り返してきた結果、複雑な構造となったため、電車の乗換えの利便性、バリアフリー化、谷地形からくるゲリラ豪雨対策といった点で課題が生じていました。

こうした背景を踏まえ、渋谷駅周辺地域は2005年に都市再生緊急整備地域、2012年には特定都市再生緊急整備地域に指定されました。特定都市再生緊急整備地域に指定されることで、都市の国際競争力を図るために、駅だけでなく高層ビルの建造等駅周辺を含めた大規模な開発が可能になり、インフラ整備に補助金を充当して事業を促進することができます。2026年度の完成を目指して、現在は監督行政や事業者、鉄道会社等が関係する複数のプロジェクトが進行しています。その中でURが関与しているのは、渋谷駅街区の土地

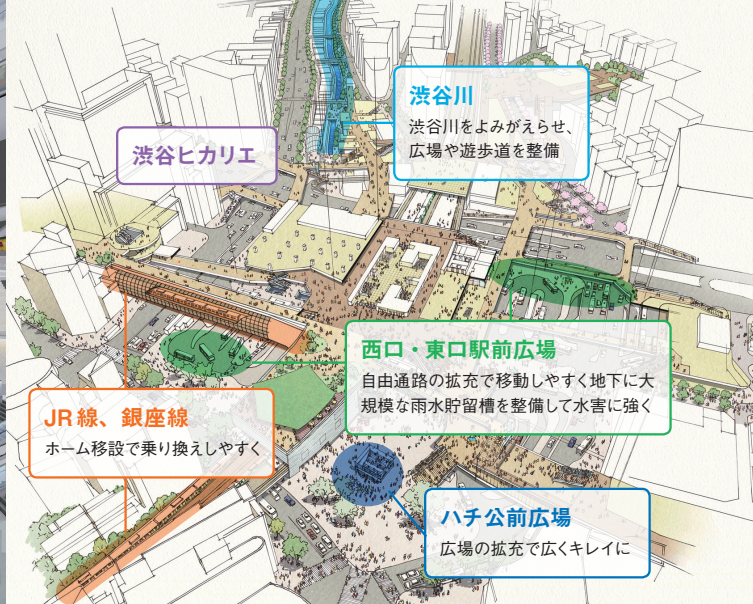


三上 拓（みかみ・たく）

独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）
東日本都市再生本部 事業推進部
渋谷駅エリア計画チーム
東京大学大学院 新領域創成科学研究科
自然環境学専攻 修了



提供：渋谷駅街区土地区画整理事業施行者



提供：渋谷駅前エリアマネジメント協議会

高度経済成長を終え、少子高齢化と人口減少に直面する日本のまちづくりにおいて、都心部の再生のみならず、地方創生が重要なテーマとなっています。しかしながら、都市再生は地方の多くの自治体があまり経験していない分野であり、ノウハウは多くありません。また、海外旅行者向けの観光産業が拡大しているため、より国際競争力の高いまちづくりを行う必要もあります。つまり、都市再生の重要性は全国的に今後も増していくことは確実であり、URが全国でまちづくりを

■ 社会の変化に伴い、都市再生の必要性が増す

高度経済成長を終え、少子高齢化と人口減少に直面する日本のまちづくりにおいて、都心部の再生のみならず、地方創生が重要なテーマとなっています。しかしながら、都市再生は地方の多くの自治体があまり経験していない分野であり、ノウハウは多くありません。また、海外旅行者向けの観光産業が拡大しているため、より国際競争力の高いまちづくりを行う必要もあります。つまり、都市再生の重要性は全国的に今後も増していくことは確実であり、URが全国でまちづくりを

画整理事業および渋谷駅前のエリアマネジメントです。東京急行電鉄(株)を代表者とする土地区画整理事業の共同施行者として、安全で快適な広場空間の形成や交通結節機能の強化のため、東西の駅前広場および地下広場の整備や渋谷川の移設・下水道化を行い、雨水貯留槽を地下に設けることで豪雨に強いまちへ再生します。また、銀座線の橋脚の移設や、駅東西を結ぶ自由通路の拡幅も行います。今回のプロジェクトでは土地区画整理事業での「川を移動させたり、地下巨大構造物を作る」といったダイナミックな計画での行政協議等の技術支援という役割もありますが、一方のエリアマネジメントでは事務局の一員として関係者と共に渋谷駅周辺開発の発信、共有化を行い、まちづくり活動を通じてプロジェクトを推進する役割も担っています。中でも私が担当しているのは土地区画整理における東口駅前広場のデザインと、エリアマネジメントにおける渋谷駅前全体の情報発信や広場利用等のルール構築等、渋谷駅前エリアのブランディングにつながる仕事をしています。

「こうあるべき」という未来の渋谷のビジョンは揺るがしてはいけなく考えています。そこで活きるのが、理想と現実をロジカルに埋める理系の力。ロジックだけで物事が進む世界ではありませんが、ロジックがなければ説得力に欠け、「現実」からビジョンを「実現」させる力が揺らいでしまう。ビジョンを補強し、みんなが「良い」と思えるストーリーをつくる上で、理系として培ってきたロジカルな姿勢が活きるのです。

■ 理系の素養を活かして、ビジョンを実現化する

まちづくりは、様々な専門家や事業者、市民の相互作用によってできあがる総合芸術とも言えます。そこに関わる上では、ある分野のプロフェッショナルであることも必要ですが、「どっという街に住みたいか」という市民の目線も欠かすことができません。URは幅広いフィールドを持っており、理系総合職として様々な関与の仕方ができる職場です。スペシャリストとして経験を積み技術を磨きながら、ゼネラリストとしての広い視座も身につけていく。まちづくりは、そんな成長体験ができる舞台といえます。

渋谷のまちづくりの特徴は、多くの人が関わり、周辺の開発が同時に複数進行しているところ。それらをまとめ、あるビジョンに向かって全体を調整しながらプロジェクト推進のサポートを行うのが私たちURの役割です。しかし、生じる課題に対していちいち最大公約数的な解を採っていると、結果的に利用者にとって不便なまちになってしまうこともあります。その際、「こうあるべき」という未来の渋谷のビジョンは揺るがしてはいけなく考えています。そこで活きるのが、理想と現実をロジカルに埋める理系の力。ロジックだけで物事が進む世界ではありませんが、ロジックがなければ説得力に欠け、「現実」からビジョンを「実現」させる力が揺らいでしまう。ビジョンを補強し、みんなが「良い」と思えるストーリーをつくる上で、理系として培ってきたロジカルな姿勢が活きるのです。